

洋野町デイストピアストーリー

岩手県洋野町立中野中学校

三年 馬場 權斗

「このままだと洋野町はなくなってしまふ。」

私の住む洋野町は岩手県最北端に位置する、人口約一万七千人の町だ。全校生徒四十五名の中野中学校では、海と共に生きる洋野の未来について考える「海洋教育」に取り組んでいる。毎年、学校近くの有家浜での海岸清掃や、震災復興列車に手を振る洋野エモーションの実施の他に、各学年で洋野のよさや未来について考える学習を行っている。

昨年、私たちの学年では、青森県八戸方面の産業の特徴について体験学習した後、洋野町の最悪の未来「デイストピアストーリー」を作成することから、洋野町の未来について考えた。今のまま時間が進めば洋野町の自然や産業、住んでいる人たちはどうなっていくのだろうか。一つひとつ私たちが考えたデイストピアストーリーの結末は「洋野町がなくなる」だった。今、私たちが住んでいる町がなくなる。それは自分たちの故郷がなくなることを意味するたため、なおさら洋野町がこのまま残り続けてほしいと思った。想像した未来にならないように、洋野町や私たちが住む中野にあるものをどう未来に残していくかを考えた。その結果、洋野町独自の魅力をもつグループに分かれ伝えることにした。洋野町は、

ウニ、アワビ、ホヤなど海産物が有名だが、製法にこだわった乳製品、シイタケ、木工品の他に、伝統芸能「ナニヤドヤラ」、美しい海と山、そして日本一の星空があることを、それぞれの場所に行き実際に

行つて学んだ。

しかし、いくら素晴らしいものがあっても知らなければ誰もやってこない。そこで、私たちはCMやSNSなどを使えばたくさんの人に知ってもらえるのではないかと考えた。しかし、CMは作るのにお金がかかる。SNSは、若者には広がるがお年寄りには広がらない。年代を超えて広く知ってもらうためには、誰でも自由に手にでき、時間がたつても残しておくことができるフリーペーパーがいいと考えた。そこで私たちは、たくさん地域のの人に洋野町をPRするために、洋野町長からふるさと特別大使任命証を直接いただき、三年生の修学旅行先の東京中野ブロードウェイで、PRのチラシを使った販売体験を行った。その時、お客さんから「今年もここでやるのを待ってたよ。今年は何を売っているの?」と声を掛けられた。年に一回の活動で、たくさんの方に印象づけることができているという、先輩方の今までの活動の成果を実感した。だから今年の私たちのPR活動も、今後の洋野のためになくてはならないものだと思った。

そして今、私たちは洋野町をPRするためのCM作りに取り組んでいる。二年生の時、CMはお金がかかるからと案だけで終わっていたのだが、洋野町が毎年「ふるさとCM大賞」に応募していることを知り、今年は自分たちが作って応募したいと役場の方にお願ひしたのだ。一人ひとりが洋野町の何を伝えたいのか考え、そのためにどの場所で撮影するか、テーマやストーリー決め、配役決め、どう終わらせるかなど、みんな真剣に考えた。ついこの前、「ど

うせ却下されるだろう」と思っていたストーリーが先生の審査を通過した。今まで学習してきた内容をみんなで考えて盛り込んだストーリーだったから嬉しかった。役場の方に、自分たちが紹介したい洋野町の姿を伝え、CMを作り上げていくのは、難しいこともあるが、テレビで流れる自分たちのCMのことを考えると楽しみでたまらない。そしてCMを見た人たちの目に留まり、たくさんのお客が来ることで今よりもぎやかな町になってほしい。

私は洋野町がとても大好きだ。部活の遠征が何日も続き疲れていても、洋野町に戻ってくると大きな安心を感じ、体も心もゆつくり休めることができる。こんな町は他にはないと思う。恵みを与えてくれる海、四季折々の色を作り出す山、感動と癒やしを与えてくれる星。こんなに他の所に誇れる大自然がある洋野町を私は手放したくないし、なくしたくない。自然だけではなく、特産品も伝統芸能や歴史も未来に残したい。何より洋野の美しい自然や、伝統芸能、特産品、歴史、それらを支える「温かい洋野人」をずっとつなげていきたい。学校帰りに「おかえり」と声をかけてくれたり、登下校の安全を見守ってくれたりする地域の人たちの温かさは何にも代えられない宝物だ。

「洋野町は小さくない。今の洋野町を未来に残す。」そのためには、私たち一人ひとりがしっかりと洋野町の未来について考え、様々な機会を使って多くの人にPRし、知ってもらう必要がある。そして、一人から十人、十人から百人に、今私たちが洋野町で当たり前前に感じている、たくさんのお客が来るのがあってほしい。